（翻訳）名女優物語（１[1]）

作　者　不　詳
（訳）鈴木　暁

はじめに

作者不詳の『名女優物語』（*La Fameuse Comédienne*, 1685）には、妻アルマンド（Armande Béjart, 1640頃–1700）のコケットな性格と振る舞いに思い悩む苦しい胸の内を、友人のシャペル（Chapelle、本名 Claude–Emmanuel Luillier, 1626–86）に激白するモリエール（Molière、本名 Jean–Baptiste Poquelin, 1622–73）の姿が描かれている。このモリエールを、『人間嫌い』（*Le Misanthrope ou l'Atrabilaire Amoureux*, 1666）で、愛するセリメーヌのコケットな性格に苦しみ、その悩みを友人フィラントに打ち明けるアルセストに重ね合わせて見る向きもある[2]。

『名女優物語』は、モリエール研究にとって重要な資料の一つである。しかしながら、モリエールの私生活についてはほとんど知られておらず、よって本物語の評価もまたまちまちである。前記ジャザンスキ（註２）のように評価する者もあれば、数ある『モリエール全集』の中でもとりわけ権威のあるものとして知られるフランス大作家叢書と新旧２種のプレイヤード版に限ってみても、大作家叢書[3]も新しいプレイヤード版[4]も懐疑的である。一方でプレイヤードの旧版は断定を下さずに、ジャサンスキを参照するように書く[5]。

『名女優物語』に対する諸家の評がどうであれ、この作品の全体像はまだ知られてはいない。更にイタリア語訳者のチェーザレ・ガールボリによれば、同氏の知る限り、同氏の翻訳本が出た時点で、それが初の外国語訳である[6]。

このような状況であれば、ここに本物語を翻訳する意義は十分に認められるであろう。

（アルマンド・ベジャール[7]）

出版者より読者へ

私はこの物語の作者も、誰の手から私にもたらされたのかも知らない。ある郵便配達人がこの町を通りかかって私の店で本を何冊か買ったとき、私にこの本を渡して、これはその細部に至るまですべて実話だと保証してくれたのである。私はこの贈り物を大衆に提供し、そのコケットリーにおいても、最初の夫であった故モリエールの名声からしても有名なこの名女優の主な情事を大衆に知らせるべきだと思った。

その同じ郵便配達人が私に保証してくれたことによると、この物語の作者は無数にある些細な恋の出来事は、その事情から、この本にもその女主人公にもそれほど名誉なことではないと判断して省き、このコケットな女優に起きた主な情事のみを書き記したのだという。このような物語を書くために、これほど多くの題材を提供し得る女優はフランスにはいないと私は確信している。将来そのような物語が見られることを期待しながら、私は読者の皆様に私の手に入ったままに、付け加えることもなく、省略することもなく、そのままの物語を提供する。お楽しみになられんことを。アーメン。

名女優物語もしくはかつてモリエールの妻であり未亡人であったラ・ゲランの物語

ラ・ゲランの物語

かつてラ・モリエールと呼ばれていたラ・ゲラン自身は、その人生によって多くの興味あることがらを提供し得るような著名な人物ではないが、彼女の職業、最初の夫の名声と彼女の振る舞いは、その生まれと地位の欠如を補うに十分なものであると私は考えた。世間にはあの有名な喜劇俳優を知らない人、あるいは少なくとも、その作品が証明しているように、その書き物のジャンルにおいてその時代の第一人者として語られるのを聞いたことのない人はほとんどいない。

モリエールは、自分の力で著名な作家たちから抜きん出たのであるが、その妻もガラントな女たちの中にあって劣らず有名である。すべての国の人々が彼が演劇に提供した作品を驚嘆すべきものと考えたが、その妻はすべての職業の人々に愛人を持ち、モリエールに讃辞が送られる以上に甘い言葉がその妻には言われてきたのである。しかしながら、彼女がガラントリーにおいてあれほどの知者であったことを驚いてはならない。というのも彼女の教育がそれに多大に貢献したからである。

彼女は、故ベジャールの娘である。ベジャールは田舎芝居の女優であり、娘が幸福な誕生をしたとき、ラングドック地方の数多くの若者に言い寄られていた。従って、これほど込み入ったガラントリーの状況で、誰がその父親であるのかを言うのはとても難しいであろう。それについて知られていることといえば、彼女の母親は、情事にあっては、モリエールとの間のそれを除いて身分のある者しか受け入れず、つまりこの理由で、その娘はとても高貴な血に属すると断言したというのである。これまたその哀れな女が常々娘に勧めていた唯一のことであるが、それは選ばれた者にしか身を任せてはならないということであった。彼女はずっと以前からモリエールの妻ではあったが、彼の娘であると信じられてきたのである。しかしながら真実はよくは知られていない。彼女はその最も幼い時代を南仏の著名な家系のある夫人のところで過ごした。ラ・ベジャールの属する劇団の座長であったモリエールは、リヨンへ行くことを決め、その娘をその夫人から

引き取ったが、その娘にとても深い愛情を抱いていたその夫人は、彼女を母親の手に任せて旅芝居の役者たちについて行かせることを怒った。

彼らがリヨンに着くと、そこには別の劇団がいて、そこにはラ・デュ・パルクとラ・ド・ブリーが属していた。最初モリエールは前者の美しい顔立ちに惹かれたが、彼らの心情はこの本のテーマには適していないし、当然ながらその女はより高名な男性を望んでいて、モリエールをひどく侮蔑したので、モリエールはその願いをラ・ド・ブリーの方へ向けざるを得ず、彼女からも好意を得たのである。モリエールはその気持ちがとても強かったので、彼女から別れる決心ができず、彼女をラ・デュ・パルクと一緒に自分の劇団に引き入れる秘策を見つけた。ラ・ベジャールはこの結び付きを非常に悲しい思いで耐えた。しかしながら、それが薬の効かない病気だと思い、最良の決心をした。すなわち、彼女がこれまでモリエールに対して持っていた権威を常に持ち続け、ラ・ド・ブリーと彼との間の関係を隠す手段を取らせたのである。それで何年間かはうまくいっていた。

しかしながら、小さなベジャールが成長してきて、それがずっと前からモリエールを自分の方へ取り戻す希望を失っていた母親に、彼に娘を恋させようという考えを抱かせた。それはかなり難しいことであった。というのも、彼がすでに愛しているラ・ド・ブリーはとても端正な顔立ちをしていて、一方小さなベジャールには、美しさの片鱗がないながらも多くの男性たちの好みに合ったあの魅力は、若さが故に、まだなかったからである。しかし、恋敵を破滅させるとあれば、嫉妬した女は何をしでかさないであろうか？

彼女はモリエールがひどく若さを愛していること、それに育ててきたのだから、彼女の娘に対して特別な感情を持っていること、そして娘の方も他の父親を知らないものだから、モリエールを自分の父親であるかのように愛していることを認めて喜んだ。ラ・ベジャールは、それが自分の計画を成功させる唯一の方法であるかのように、娘を子どもらしい可憐な精神のままに育て、その心を掴みきっていて、その気質を知っている子どもを自分のために育てるという満足をモリエールに大袈裟に言って聞かせた。それに上流社交界を見たことのある大多数の人々にはほとんど見られない誠実さに出合えるのは、このような無垢な年頃にしかないのだ、とも。そして彼女としては、どのようにしたら繊細な男性が多くの策謀を持った女とうまくやっていけるかわからないし、若い女が自分の愛する男性を騙すのを躊躇うのと同じくらい、コケットな女は貞節であろうと罪を犯すのだとも彼に大袈裟に言ったのである。彼女は同じことをしばしばモリエールに繰り返し、彼が部屋に入ってくるのを見て娘の顔に現れるあの自然な喜びと、彼の望みに従う盲目的な従順さを巧みに彼に指摘したのだった。彼女はとても上手にものごとを運んだので、彼は娘と結婚するしかないと思い至ったのである。

恋敵の隠れた意図に気づいたラ・ド・ブリーは、自分の名誉をいたく傷つける結婚が実現するのを妨げるためにあらゆる手段を用いた。彼女にとって、それはそれなりの理由はあることだが、自分より魅力の劣っていると判断した若い女を愛人に譲ることよりも残酷なことは何もなかった。彼女はモリエールにその心配を伝え、非難をして彼をある程度不安がらせた。彼は彼女に対しては大変誠実であったし、彼女からも愛の証しを受けていたので、このような破目に陥ってしまったのである。

しかしながら、彼らの劇団がモリエールに対する評価だけでパリを本拠とする許可を得、彼が自分の気持ちにより自由に従うことができたのはラ・ベジャールにとっては幸いなことであった。パリに到着してしばらくして、彼は若いベジャールと結婚した。彼は何作か劇を作り、世界で最も正しい分別の持ち主である最も偉大な王から讃辞を言われるのを聞く喜びを得た。

モリエールの成功は、彼の妻に、それ以後彼女にあれほど自尊心を持たせ、あれほど高慢にすることになるあの魅力よりも多くの愛人を惹きつけた。宮廷には自分がその恩恵を受けるにふさわしいと思わない者は誰もいなかった。

アベ・ド・リシュリユーは彼女を情婦にしようと思った最初の者たちのうちの一人であった。彼はとても気前がよく、彼女の方も極度に出費を好んだので、ものごとはすぐに成就した。度外れの衣服とご馳走は別として、日に4ピストル与えることが取り決められた。アベは毎朝たがわずに、召使いに二人の取り決めの金を届けさせ、毎晩食後に彼女に会いに行った。何ヶ月間かは何の問題もなかった。しかし、モリエールが『エリード姫』を作り、ラ・モリエールが姫を演じ、それは彼女がかつて演じた中で最も重要な主役であった。というのも、それまではラ・デュ・パルクがそのような役をすべて演じ、彼女が舞台の花形女優であったからだ。しかしラ・モリエールが非常な輝きをもって舞台に現れたので、モリエールは宮廷のあの輝かしい若々しさのただ中に彼女を晒してしまったことをすっかり後悔した。というのも、宮廷がシャンボールに着くや、王は例の祝宴を催し、彼女はギシュ伯爵の虜になり、ローザン伯爵が彼女の虜になったからである。ローザン伯爵は、自分を満足させるためには何事も容赦しなかった。しかし自分の恋の相手に夢中になっていたラ・モリエールはローザン伯爵のいかなる提案も聞こうとはせず、逆にギシュ伯爵が自分に対してつれないことをラ・デュ・パルクのところへ行って嘆くだけしかできなかった。

だからといって、経験上何ものも自分に逆らえないことを知っていたローザン伯爵は、彼女を自分の望むところにこさせる希望を失わなかった。その上彼は、ギシュ伯爵がほとんど運によらずに女たちから愛される幸せを手に入れている男であることを知っていた。だから彼は、ギシュ伯爵のその無頓着なやり方がついにはラ・モリエールを不快にさせるだろうと疑いもしなかったし、ギシュ伯爵の星が彼女の心の中に、彼が気に入ったすべての女どもの心の中に生じさせたものを生じさせることも疑わなかった。ローザン伯爵は間違ってはいなかった。というのも、ギシュ伯爵の冷淡さに怒ったラ・モリエールが、つれない者の手に再び陥るのを防いでくれる避難場所として、ローザン伯爵の腕の中に飛び込んだからである。衛兵隊長とその他多くの若者たちが彼女を慰めようと口を挟んだ。

これらすべての馬鹿騒ぎを告げられたアベ・ド・リシュリユーは、慎重に彼女を見晴らせ、ギシュ伯爵と関係中の彼女が伯爵に宛てて書いた手紙を巧みに手に入れた。その手紙に曰く、

> 愛しい伯爵様、私は自分の弱さを白状します。愛する方から嬉しいことを言われるのを聞く楽しみがどうであれ、皆さんがあなた様を私と同じように美しいとお思いになっていると知って、少しばかりの嫉妬心を抱かざるを得ません。あなた様が皆さんに認められることには私は悲しみは感じませんが、フランスの最も美しい女たちがあなた様の気に入ろうと努めていることには心配いたしております。私を安心させることといえば、彼女たちが私のお慕いする伯爵様に、私が感じているのと同じ愛情を決して持つことはないだろうということです。ごめんください。今日の夕食後にいらしていただき、この不安から私をご安心させてくださいまし。

この手紙にこれほど多くの愛情が込められているのを見、またそれが自分にはほとんど向けられていないことをこの手紙が雄弁に証明していることに怒ったアベ・リシュリユーだが、非難しようという気にはならなかった。決して何の役にも立たないからである。彼は彼女を昼間のうち

だけは自分のものとすることができたことのみに大変な幸せを感じ、そのとき以来、彼女をそのままにしておくことに決めた。そして彼はモリエールに、大衆の気に入るために多大の努力をすることが自分の妻の行動を確かめる心配りを失わせていること、そして彼がすべての人を楽しませようと働いている間に、すべての人が彼の妻を楽しませようと努めていることを知らしめたのだった。

探求心が忘れさせていた愛情を、嫉妬心が彼の心の中に目覚めさせた。彼はすぐに妻の元に駆け込み、大変な不満を表明した。そしてどれほど大切に育ててきたか。敢えて情念を抑え、夫というよりむしろ恋人として振る舞ってきた。それなのに、これだけの恩恵を受けておきながら、その報いが宮廷の笑いものにすることだった、と彼女を非難した。ラ・モリエールは泣きながらギシュ伯爵に対して抱いていた気持ちの一種の打ち明け話をした。その気持ちについては、罪といってもそれは意図の中にしかなく、経験の足りなさが往々にしてこのような行動を取らせてしまう若者の最初の迷いは許されなければならない。しかし彼が自分にしてくれた恩恵は承知しているから、再びこのような弱さに陥ることはないだろうと釈明した。

涙によって貞節を納得したモリエールは、怒りにまかせたことを幾重にも詫び、優しくこう諭した。世間体のためにはそれだけでは十分ではない。良心の純粋さが我々を正当化するのであり、この上しなければならないのは、とりわけ悪を信じてしまいがちで、ものごとを寛容に判断することから離れてしまっている精神が見られるこの時代にあっては、見かけが我々の真の姿とは反対のものにはならないようにすることである、と。このような性格の女ならすぐに心を動かされるものであるが、彼はこうした彼の叱責に心を動かされた彼女から離れ、パリ帰還に向けてあらゆる準備をした。旅の間、彼女は彼の望み得る媚びを示した。そして彼は自分のためには、旅がもっと長くなるようにと願ったことであろう。というのも、パリに着くやいなや、今ではゲネゴー座の座席案内係であり、当時舞台への呼び出し係の妻であったラ・シャトーヌフの忠告を容れて、彼女はかつてより華々しい生活を始めたからである。

世間を十分に見てきて、それを話題にできるこの実直な相談相手は、彼女にこう言い聞かせた。綺麗な女は地上で知り得る執着によって身を持ち崩してしまうし、その上恐るべき愛人というものがいる。大多数の男性はアベ・ド・リシュリユーのように穏やかに身を引くことはない。愛情心に関して言うなら、それは運命を害するもののようであるから、それは改めなければならない過ちであるし、彼女は自分の若さのみを利用するように考えなければならない。もし自分の慎重さに立ち戻りたければ情事は決して知られないように秘密に行わなければならない。そしてあらゆる試練を受け得る自分自身の慎み深さを当てにしてもよい、と。ラ・モリエールは彼女を抱擁すると、その忠告に従うことを約束した。それ以来彼女はその忠告を十分に利用したので、彼女のことを比類なき貞淑な女だと信じる無数の愚か者をじらしている間、ラ・シャトーヌフから廻された愛人たちを決して拒んだことはなかった。

休息のためにはよくないことに、悪い意図を持った者たちに妻の行動について知らされたモリエールは、それまでなかったほどの激しさで不満を再燃させ、彼女を閉じ込めさせるとまで脅した。この非難に侮辱されたラ・モリエールは、涙を流し、気を失い、妻には大変弱かった夫に、彼女をこのような状況に追い込んだことを後悔させた。彼は急いで彼女を正気に戻し、愛のみが彼の怒りを引き起こさせたということ、彼女は彼の心を占める力を持っていることを考えてくれるように懇願した。というのも、彼女に対するあらゆる不満の種にもかかわらず、彼は彼女がもっと慎み深い行動を取ってくれれば、彼女を許す用意はできているからである。

これほど特異な夫なら彼女に後悔の念を与え、彼女を賢くすることもできたであろう。が、彼

の好意は正反対の結果を与えた。彼と別れるこんな好機を再び見つけることのできない恐れが彼女に大変高慢な口調を取らせ、こうした欺瞞が誰によって彼に吹き込まれているのかがよくわかると言い、こう付け加えたのである。毎日無実のことに告発されて不愉快な気分である。彼は別れるための手段を取りさえすればよい。彼女たちの家にいて、彼女たちが結婚しても出ていかないラ・ド・ブリーと特別な関係を相変わらず続けている男にはもう我慢できない、と。

ラ・モリエールを宥めようとする心遣いは無駄だった。このとき以来彼女は夫に対して恐ろしいぐらいの嫌悪感を持ち、彼が結婚によって得た夫の特権を利用しようと思ったとき、彼をこの上ない軽蔑をもって扱った。最後に彼女はものごとを大変極端に持って行ったので、彼女の悪意のある性向に気づき始めたモリエールは、口論以来絶えず求められていたベッドを共にしないことに同意した。それで、高等法院の決定なしに、彼らはもはや夫婦生活を送らないことに決めたのである。

モリエールはこうした無接触の中で彼女と暮らすことを決心したが、自らを大きく傷つけざるも得なかった。たとえ理性が彼に妻を、その振る舞いがオネットムの愛撫に相応しくない女と見せたとしても、彼の優しさは、結婚が与える夫の特権を利用せずに彼女を見るという苦しみを彼に予想させた。

彼がある日、彼のオートゥイユの庭園でそんなことを考えていると、シャペルという友人の一人がたまたま散歩で通りかかり、近づいてきて、いつもより心配そうな彼を見た。彼は心配の種について何度も尋ねた。世間ではごく当たり前の不幸なのだが、それに対して平常心があまりにもなさすぎるのを感じ、それにいくばくかの恥もあって、モリエールはできる限り抵抗した。しかしその時彼は恋をしてきた人々にはとてもよく知られたあの心の状態にあったので、気分を楽にしたいという欲求に屈し、妻に対して取らなければならなかった手段が今彼の置かれた重荷の原因である、と潔く友人に告白した。

彼がこういったことには超越していると思っていたシャペルは、他の男の弱さをあれほど上手く描ける彼ほどの人間が毎日彼の非難する弱みに陥るとは、とからかった。そしてすべてのうちで最も滑稽なことは、優しさを示したのに、それに答えてくれない女を愛することだ、と言った。

「僕ならね、とシャペルは彼に言った。白状するけれども、もし僕が君のようになるほどかなり不幸で、しかも僕が愛している女が他の男たちに身を任せることがわかっていたら、僕はその女を大変軽蔑するだろうし、そうすれば必ずや僕の目を覚まさせてくれるだろう。ただ、もしそれが情婦であれば、君には味わえない満足があるわけだし、怒ってしまえば通常、愛は復讐に変るから、それが君の奥さんが君に引き起こすあらゆる苦しみを贖うことになるんだ。というのも、彼女を閉じ込めさせさえすればいいんだからね。それは君の精神を休息させる確かな方法でもあるんだよ。」

友人の言うことをかなりおとなしく聞いていたモリエールは遮って、彼が恋をしたことがないのかどうか尋ねた。

「もちろん、とシャペルは彼に答えた。分別のある男がそうであるように、僕だって恋をしたことはあったさ。でも僕は、僕の名誉が忠告するようなことのために大変大きな苦しみを自らに背負おうとはしなかっただろうよ。僕は君がこんなに動揺しているのを見て恥ずかしいよ。

――君はまだ何も愛したことがないってよくわかるよ、とモリエールは彼に答えた。君は愛そのものではなく愛の似姿を思い浮かべているんだ。この情念の魔力を君に知らしめる無数の例を君に挙げようとは思わない。ただ一つだけ僕の苦悩を率直に話して、ひとたびこの情念がその性質によって僕たちに影響力を持ったとしたら、どれほど男というものは自分の主人足り得ないか

ということを君にわからせてあげよう。君はさっき僕が毎日大衆の見せ物にしている肖像によって男の心の完璧な知識を持っていると言ったけど、それについて答えるとすると、男の弱さを知るために、できる限り研究をしてきたということには同意はするさ。でも僕の知識は危険を避けることができることを教えてはくれたが、僕の経験はそれを避けるのが不可能だということをいやというほど見せつけたんだ。それは毎日自分自身で味わっていることなんだ。僕は優しさには最も向かないように生まれついたし、どんなに努力したって愛に対する欲望に打ち勝つことができなかったから、僕は自分を幸せにしようとしてきたんだ。つまり、でき得る限り感じやすい心をもった幸せ、ということさ。誠実な愛情に値する女なんてほとんどいないし、打算と野心と自惚れが女どものあらゆる情事を結び付けるものだって納得していたよ。僕は自分の純粋な選択が僕の幸せに答えてくれることを望んだ。僕は、いわば揺りかごから妻を抱いてきたし、念入りに育ててきたけど、その噂は君だって無論聞いて知っているだろう。僕は時が経ったとしても壊れることのない愛情を習慣によってあれの心の中に入れることができると考えたし、そのために何事も忘れることはなかった。あれと結婚したとき、あれはまだまだ若かったから、僕はあれの悪い性向には気づいていなかったし、こうした愛の契約をした大多数の人に比べれば、それほど不幸ではないと思っていた。だから結婚は僕の愛情を遅らせることはなかったが、その後あれがあまりにも無関心なものだから、僕が払ったどんな用心も無益だったことに気づき始めたんだ。あれが僕に感じていることは、幸せになるために僕が望んだこととはあまりにもかけ離れている、とね。夫がそんなことをやるのは滑稽だと思えるような思いやりさえしてやったことに自分を非難したものさ。あれが僕にほとんど優しさを見せないのはあれの気質のせいだと思ったよ。自分の過ちを納得させるならいくらでも方法はあったし、その後すぐのギシュ伯爵に対するあれの狂ったような情念は、あまりにも噂になったものだから、僕は表面的な平静さをも保てなかったんだ。それを初めて知ったとき、あれを変えさせることができないとわかっていたから、何ものも容赦しなかった。そのために僕の精神のあらゆる力を使った。自分を慰めるのに使えるものには何でも助けを求めたよ。僕はあれの長所といえば無垢しかない女だと思ってたから、不貞を働いてからは、あれには長所などもうなくなってしまった。それ以来コケットな妻を娶り、その悪しき振る舞いも彼女からその評判を取り去ることにはならないと言われたとしても、そのことを納得したオネットムのようにあれと一緒に暮らすことを決めたんだ。だけどそれほど美しくもなく、僕が施した教育のおかげで才気がほとんどない女が一瞬にして僕の哲学を破壊してしまったのを見て悲しんだのさ。あれがそばにいると、僕は決心を忘れてしまった。自分を弁護しようとあれが発する最初の言葉で僕は納得させられてしまい、僕の疑いには根拠はなく、安易に信じ込んでしまったことをあれに詫びてしまったんだ。僕の善意はあれを変えることはなかった。だから僕は、あれが僕の妻ではないかのように一緒に暮らすことに決めたんだ。でももし君が僕の苦しみを知っていてくれたら、僕を憐れんでくれるだろう。僕の情念はあれの関心に憐れみをもって入るところまで行ってしまったんだ。僕があれに感じていることにどれほど打ち勝つことができないかと知ると、あれはコケットであるという性向を打ち壊すことが恐らく難しいのだろうと自分に言い聞かせているのさ。だからあれを非難するよりも憐れもうという気になってしまうんだ。そんな愛をするなら詩人になるべきだ、と君は無論言うだろう？　でも僕としては、愛には一つしかなく、このような繊細なことを感じたことのない者は、決して本当に愛したことはないんだと思うんだ。僕の心の中では、この世のすべてのことがあれと関わっている。僕の頭の中はあれのことで一杯だから、あれがいないと気晴らしになるものなど何もないんだ。あれを見ると、感じはするものの説明のつかない感動と興奮が僕から考えるということを取り去ってしまう。あれ

の過ちには目を向けることもなく、あれの愛すべきものしか残らないんだ。こんなの狂気の極致だろ？　僕の理性で残っているものも、自分の弱さを知らしめるだけで、それに勝利できないって君も思うだろう？
――僕も君に告白すると、と彼に友人が言った。君は僕が思っていた以上に憐れむべきだが、時間に期待しなければいけないな。その間は努力を続けたまえ。努力しているなんて考えなくなれば、その結果も出てくるだろうよ。僕としては、君がすぐにも満足するように願掛けに行ってくるよ。」

註

1．翻訳の定本としては *LA FAMEUSE COMEDIENNE OU HISTOIRE DE LA GUERIN AUPARAVANT FEMME ET VEUVE DE MOLIERE*, Réimpression conforme à l'édition de Francfort 1688, suivie des Variantes des autres éditions et accompagnée D'UNE PREFACE ET DE NOTES PAR JULES BONNASSIES, BARRAUD M DCCC LXX の電子ファイル（http : //gallica.bnf.fr/ark : /12148/bpt 6 k 56260886/f 12.image 2017年 6 月17日取得）を使用し、適宜ガールボリによるイタリア語訳（註 5 ）を参照した。紙幅の制限があるので、本稿では出版者から読者に宛てた前書きと本文の三分の一程度を載せることにし、残りは次回と次々回に回したい。

2．例えば René Jasinski, *Molière et le Misanthrope*, Nizet,1963, P.50 note, P.57, PP.59–68, P.61 note など

3．Les Grands Écrivains de la France, Nouvelles Éditions publiées sous la direction de M. Ad. Regnier, Molière Tome V, Hachette, 1880, PP.385–386

4．Molière, *Œuvres complètes* I, Édition dirigée par Georges Forestier, avec Claude Bourqui, Gallimard（Biliothèque de la Pléiade), 2010, P.1437 n.1

5．Molière, *Œuvres complètes* II, Texte établi, présenté et annoté par Georges Couton, Gallimard（Bibliothèque de la Pléiade), 1971, P.130

6．*La Famosa Attrice*, a cura di Cesare Garboli, Adelphi Edizioni, 1997, P.11

7．Jules Bonnassies 版（註 1 ）の口絵